

学籍番号： 4312100372

氏名： 樋渡 翔大

実習先： 中之島

実習期間：平成 30年 5月11日 ～ 5月13日

### 1. 自然環境

今回実習で向かった中之島は吐噶喇列島に所属する島である。面積は34.47km<sup>2</sup>、周囲30km、最高点は御岳の979m。行政区画としては十島村に属する。また、港から宿に向かう途中、牛や県指定天然記念物のトカラ馬が放牧されているのを見ることができた。

### 2. 社会的背景

人口は 150 人程、島名は七島の中ほどにある島であるということに由来している。

【以下 Wikipedia より抜粋】

中之島という地名は江戸期より見え、薩摩国川辺郡のうちであった。薩摩藩直轄地で郷には属さず、薩摩藩の船奉行の支配下に置かれていた。

口之島や宝島と同様に津口番所、異国船番所、異国船遠見番所が併置されており、鹿児島城下より派遣された在番と横目が常駐していた。中之島の在番は中之島の他に諏訪之瀬島、悪石島を管轄しており、在番の指示を受けた郡司が島政に当たったとされる。「薩藩政要録」及び「要用集」によると、所惣高 82 石余とある。

1896 年（明治 29 年）に川辺郡から大島郡に移管された。

1908 年（明治 41 年）に島嶼町村制が施行され、トカラ列島及び現在の三島村の区域より十島村（じょうとうそん）が成立し、中之島は十島村の大字「中之島」となった。

第二次世界大戦終了後の 1946 年（昭和 21 年）に口之島以南のトカラ列島はアメリカ合衆国臨時北部南西諸島政庁の施政下となった。1952 年（昭和 27 年）にトカラ列島が本土復帰するのに伴い、十島（としま）村が発足した。

島内にある十島村歴史民俗資料館を訪れたが、館内にはトカラに伝わる製法で作られた丸木舟や漁具・農具が展示されていて、トカラ列島の独特の歴史や文化を楽しむことができた。



### 3. 住民の生活

同じく資料館にて撮影した、ボゼで使用される仮面の写真である。ボゼは盆の終わりに現れるとされる仮面装束で、その出現理由には諸説あるが、盆行事の幕を引くことで、人々を死霊臭の漂う盆から新たな生の世界へ蘇らせる役目を持つと指摘する研究者もいる。また、盆時期には先祖の霊とともに悪霊も世にやって来るので、その悪霊を追い払うものとする説もある。

夜に行った公衆浴場は島で管理されているものであった。台風の影響でシャワーがたびたび壊れるのだという。硫黄泉で神経痛や筋肉痛に効くとのことであった。大人10人は足をのばしても余裕で入れるくらいの大きさがあった。

#### 4. 医療供給体制

十島村に向かうフェリーは2018年現在鹿児島港から週に2回出ており、十島村の各島(有人7島)を経由し、奄美大島の名瀬港に停泊する430kmの航路である。その後同じ経路を遡って鹿児島港へと帰港する。本土から中之島への航路は220kmに及び、実際に足を運んでみて、島から本土へと治療に通うということがとても負担が大きいことなのだというを改めて実感することができた。

#### 実習概要

日付	内容
5/11	23時 鹿児島港出航。
5/12	6時 中之島到着 9時 コミュニティセンターにて診療開始 12時 昼食 13時 歴史資料館見学 14時 診療再開 17時 片付け 18時 夕食
5/13	7時 朝食 8時 島内散策 10時35分 中之島出航 12時 昼食 13時 操舵室見学  18時20分 帰港

## 振り返り記録

まず、中之島へ向かう前に行く予定であった黒島行きフェリーが雨天のため欠航となったことが、一番の学びだったと言えるかもしれない。市内ではちょっと雨降りそうだな、くらいの空模様であったが、島では船を出すことがままならないほどの天候の違いがあるのだということを予想すらしていなかったことをまず反省した。同じ鹿児島でも220km離れていれば、ましてや海の上を行こうと言うのだから今考えてみれば当たり前のことだと思いつつ、このように実際に動いてみないと気が付かない・考えもしない色んな違いがあるのだと感じた。

診療を行った中之島のコミュニティセンターでは、2台の診療台と、こじか号という診療台が備え付けられているバスの計3台体制で行っていた。最終日は午前午後とで4人ずつほどであったが、一日前には20人ほどが次々に訪れたという。診療内容は義歯の調整や、コンポジットレジン充填、検診後に口腔内清掃とフッ化物塗布などであった。診療に訪れた人はそんなに多くはなかったが、コミュニティセンターは島の子供の遊び場となっているらしく、多くの子供が遊びに来ていたり、釣りに来ている観光客や島民もいて、たくさんの島民と触れ合うことができた。宿はとても清潔感のある建物で、快適に過ごすことができた。周りは自然も自然、見渡す限り草木におおわれており、久々に大自然の中でゆったりと時間を過ごした。

今回の実習で離島の環境に直にふれて、離島診療を定期的に行わないと、島民の口腔内環境は良くなることはないと感じた。また実際に足を運ぶことで島から本土の病院に通院することの大変さを実感することができたのは、鹿児島で診療していく上でほぼ必ず出会うであろう離島から来る患者の気持ちに寄り添うためにとっても大事なことだと考える。また機会があれば違う島へも足を運んでみたいと思う。